

未来へつなぐ川 ― 問われる文化の創造と継承
日本とアフリカ、自然に育まれる同時代の生命力

第1部 自然に遊び、育まれる子どもの世界

自然に育まれた少年

― 〈川に落ちこぼれた〉子ども時代から―

河合雅雄

□はじめに

ただいま福井さんから非常に興味深いアフリカの子どもたちの自然観の形成、そういうことについてうかがったわけですが、我々からみると非常に文明からずーっと遠いところの人たちですね。けども考えてみれば、そういう文明から非常に離れた子どもたちと私なんかの子ども時代と比べてみますと、私たちが同じように自然からいろんなことを学んでそして成長してきたと思うんです。

今日は要は川が主体ですから川に関して私の子ども時代のことをちょっとお話ししようと思うんですが、だいたい題がびったりなんです、「川に落ちこぼれた子ども時代から」これは福井さんが作ってくれたんですけれども、これはもうまさにこのとおりでして、川に落ちこぼれたように遊びほうけて、その挙句学校の成績は落ちこぼれかけた、落ちこぼれてしまったことはないですけどね、けれども落ちこぼれぎりぎりになるまで野っばらや川で遊んでいました。けれどもそのことが私が動物学者になってそして自然が好きで、自然を大事にしよう、そういう気持ちを養ってくれた、というふうに思います。そういう点ではここにかなり年配の方がおられますけども、同じようにこの千曲川あるいは周辺の川でずいぶん子ども時代遊んで暮らされた同じような体験を持っておられるんじゃないか、というふうに思います。

□荒廃した川は心を痛める

私はずっと愛知県にすんでおりまして、京都に行くことが多かったわけですが、京都や東京に行くとき、とくに京都に行くときは新幹線の

席を窓際のA席にできるだけ座るんです。というのはですね、川が好きでよく見るためなんです。ちょうど名古屋から新幹線に乗ると8分で木曽川、10分で長良川、13分で揖斐川、を過ぎていきます。非常にいい川ですね。特に木曽川は満々と水をたたえて、ネコヤナギが生え、ほんとに素晴らしい川です。

ところが一方東海道を走っていきますと、有名な大井川とか阿部川とか、天竜川、富士川そういう歴史を担った大河があるわけですけど、なんとも情けない。川とは言えないですね。川原の中を小川がちょろちょろ流れてる、まことに無残といえますかね、情けない川になってる。通称川原砂漠になった、なんていう人がいます。原因ははっきりしてまして、上にどんどんダムを作ってそして水をとっちゃった、ですから下流には全然水が流れてこない。けどもそのわりに上流のほうは逆に洪水が起こるし、下のほうは渇水で困ってる。それからお茶の生育が非常に悪くなった。いろんな問題がおこっているわけですね。それはともかくとして、なんという無惨な川にしたのかなという、いつでもほんとに情けない思いをしております。

どうしても新幹線に乗ったら川をみたい、これは私の中にほんとに植え付けられた子ども時代の川の思い出、そういうものが今も生きてるんですね。今回はここに来るのは楽しかったです。中央線で来たわけですけども、だいたい川の縁を歩いて参りますね、そして川の縁にはちゃんと植物が茂ってる、ほんとにいい川沿いに走ってくれるから私はこの中央線は大好きなんです。そしてこの

千曲川。やっぱり護岸工事もあんまりないし、ネコヤナギも生えてるし、いい川だなというふうに思いました。

□川や森で遊び呆けた少年時代

子どものときは私は自然が大好きで、いわゆる昆虫少年、昆虫採集にほうけてましたし、それから春から川遊びですね、ちょうど今ごろ、もうちょっと3月の終わりごろになりますと、いつでも川に行きます。イシガメを捕るんですね。土手を歩いてると、土手の下の石積みの石の上にイシガメがひなたぼっこをしている。気付かれたら川に飛び込まれてしまうから、そうっと近づいて、そして岸から飛び降りてカメを捕る。カメを捕ってどうするかというわけじゃないんです。あんなのもって帰ってもしようがないんですけども、なんかこう狩猟本能みたいなもんですね。カメを捕る、というそのスリルと楽しさ、これはもう子どものときにはこたえられなかった。

残念ながら今、イシガメは非常に減りました。数が減ったってこともあるんですけども、一番問題は外国のカメがどんどん入ってきたことですね。子どもたちよくミドリガメってのを飼っておりますね。ミシシッピーアカミミガメというんですが、あるいはカミツキガメ、一名はワニガメなんていわれてますが、非常に獰猛なカメです。そういうものをペットに飼ってどんどん放すんです。それが増えましてもう残念ながらイシガメは15、6%しかいないですね。アカミミガメがもう60~70%。カミツキガメですらもう10%を超える。なんか外来のカメに占領されてる。まあそれだけではありません。これはよく新聞を賑わせてるようにブラックバスとかあるいはブルーギルとかですね、ああいうのが川だとか池に放されてどんどん増える。しかも彼らは肉食ですからね、在来の日本の魚を圧迫してる。なんとかそれも駆逐して日本の本来の川の生物が生き生きするようにしたいな、と思います。

□魚捕り

ところで川遊びが楽しいのは、川というのは泳ぐだけのところではないですね。泳ぐなんてあんまり面白くない。川っていうのは瀬があり深みがあり、よどみがあり、そこに生えている植物も竹

があったり、ヤナギがあったり、アシが生えたり、いろんな自然の要素を示して、それによってまたそこにいる魚が違うわけです。その魚捕りが非常に楽しかった。もちろん網で取ったり、釣りをしたり、いろんな捕り方があります。ここでも、独特のウグイをとる方法がありますね。なんて言いましたっけね。わたしは子どものときは魚を掴むのが一番得意だったんです。ウナギでもギギとか、ナマズとか、これは結構掴みにくいですけどね、ナマズはナマズでけっこう掴みかたがあるわけです。ウナギは一番大変で、あれは子どものときですから、ほんとに格闘して、あんまりたくさん捕ったことはありませんけども、大変でした。

こんな面白いことがありました。だいたい石の下にいる魚を手で掴み捕るわけです。ウナギ、ナマズとかギギ、それからオイカワとか、ムツ、ムギツクなんかがおるんですが、魚ってのは非常に方言が多いですね。メダカなんかは方言だけでおおかた200くらいになるとこういわれますけども、私の故里は兵庫県の篠山というところですけど、そこではムギツクっていうのを我々はイチクチっていってます。和名はムギツクですけども(たぶん千曲川にもおる魚だと思いますが)、ほんとう、流線型をして、大きさはせいぜい10cmくらいですかね。黒い横じまが入って、で、流線型で口の先のほうがきゅっとしまっているわけですね。ですから、一文字、イチクチ、クチボソ、そんなことをわれわれ言うてましたが、非常においしい。身がよくしまってます。それがこの一帯にたくさんいたんですね。

掴んではとりだすんですが、まだいっぱいおりますから、捕ったのをどこにやるか、しようがないから口に入れてました。で、口にくわえるわけですね。3匹、4匹。4匹くわえますとね、もう大変ですね。口に入れるのもね。前に弟がおってこれが同じことやってるんです。魚のしっぽが口から並んででているわけです。それでね、5匹目を今度は口に入れる、ってのはそりゃもうできないって言おうと思ったのだけど、僕もくわえてるもんですからどうしようもない。ところが弟がむりやり5匹目を入口にぎゅっと押し込んでいったもんですから、1匹がつると奥にはいったんですね。喉に入ったから、うわあーとふきだした。とたんに私の方も1匹が喉に入ったもんですから

ね、大変ですよ。5匹とも一気にうわっと吹き出してしまった。結局全部吐き出してしまったので、二人で立ち上がって大笑いした。そんなこともありました。

□自前の潜水帽で潜る

それから深みに行きますとね、深いとこの下に石がありますね、そこには大きなナマズとかギギがいるわけです。あるいはカワムツがいる。我々はアカモトと言ってますけど、それがどうしても捕りたいけど、3m、4m潜っちゃうと息が切れますよね。だから石の下のナマズは、簡単に掴めないから潜水帽を作ろう、ということになった。あの頃は防毒面ってありましたよ。その古手を見つけ出し、長いホースをつける。そしてひとりがホースを持ち、ひとりが潜って川底の魚を捕ってなことをやったことがあります。けれども下手して、ホースに水が入ると死にそうになります。

その新兵器を持って大滝に挑戦した。そこは大きな岩が出て、その下がえぐれてるんですね。4mくらいの穴があいている。そこには1mを超す大きなコイがおる、と言われてるんです。それをみたのがよっさんという人で、これは魚捕りの名人なんですね。いつもこんな大きな魚をいっぱい捕ってる。その人だけがあそこにおるということを言ってるんです。ほかに見た人はいない。じゃあ、あいつをやったろうということで、子どものときっていうのはほんとにもう冒険家ですからね。ヤスをもって、そしてこの防毒面の潜水帽をつけて、弟が長いホース持って上におるわけです。もちろん命綱はつけてます。そうやってこう潜っていくと、魚が洞窟からさーっと出てくる。それで中に入るとね、ほんとにおったんですよ。ほんとにイルカみたいなのがね、ぼーっとこう浮いてました。やっぱりこの話はほんとだったと思ってヤスを構えたとき、大きなコイが真っ直ぐ飛び出してきたんですね。私はとりあえずヤスを繰り出しましたが、ひっくり返ってしまった。ヤスはそれてしまいました。そのとたんに命綱が一と張ったもんですから弟が引っ張る、その間に潜水帽に水が入っちゃって、何とか浮き上がったけれども、水は飲むし、ほんとにおぼれ死にかけて、この題のようにほんとに落ちこぼれるというか、おぼれかけた。けどもとにかく岸に上がっ

てひっくり返りながら、言い知れぬ満足感がありましたね。よっさんという名人だけしか知らない、あの魚を俺は見たんだ、というなんかこう、子どもながらのなんか誇らしいような気持ち、あれは未だに忘れることができません。

□川で遊ばなくなった子どもたち

こういうようなことがいっぱいあったわけですが、残念ながら今、子どもたち川で遊ばないですね。みんなプールです。プールってのはほんとしようもないと思うんですよね。泳ぎの好きな人はいいでしょうけれども、泳ぐ以外に何にも面白いことないでしょう。川というのは、それこそ先ほど言ったように瀬があり、深みがあり、いろんなところがあって、こういう石の裏には(今の季節はちょっと早いですけどね)、5月、6月になると、いろんな卵がびしーっとなつてるとか、あるいは水生昆虫、カゲロウの幼虫だとか、そういうのがいっぱいおります。このへんではザザムシというんですか、あれを食べますね。あれは日本ではめずらしい習慣だと思いますけど——あれは私たちには魚釣りの餌なんですけど——私も初めて食べてみました。けっこうおいしいもんですね。そういうものもたくさん川にはいます。それから魚はもちろんいっぱいいますし、それからカワセミだとか、セキレイとかあいう水鳥がちょこちょこ見れる、トンボは舞っている。川というのはいろんな生き物たちと一緒に暮らしている楽しい場所、子どもにとっては川ほど楽しい場所はないとおもうんですね。

残念ながら川で子どもたちがほとんど遊ばなくなった。それから学校によってはもう、川で遊んではいけません、なんていうところもありますね。それから今はなくなったようですけど「よい子は川で遊ばない」なんて立て札がたっていたりして、あんなのみるとほんとに蹴飛ばしたくなりましたね。大の大人がそんなことしたらみっともないんですけれども、ほんとに川がとつても寂しくなりました。

なぜ川で遊ばないか、一つはやっぱり汚染ですね。たしかに一時は非常に汚くなりましたね。いまはずいぶん皆さん気をつけて、前よりはうんと良くなったし、それからかつて農薬がほんとにひどいときありましたけどね、ホリドールなんて使

ってる時っていうのはほんとに劇薬でしょう。農薬もずいぶん毒性が逡減しているとか、量も少なくする、今はずいぶん川は良くなってきたと思います。だからもうそろそろ、子どもたちが泳げる川になりかけてると思うんですが、もう一つはやっぱり危険だ、っていう理由が非常におおきいですね。子どもたちを安全に健康に育てるっていうのはこれはとっても大事なことでありますけれど、そのためにできるだけ危険から子どもをできるだけ守るために危険は排除する、そういう方向にぼっかりいってるっていうのは、私はとっても困る方向だと思います。昔川遊びしてて確かに危険なことやりましたよ。けども子どもたちは何が危険で、じゃあどうしたらその危険をうまく乗り越えられるか、そういうことをみんなちゃんと覚えていったもんですよね。子どもっていうのは大人が思っているよりももっともったいい能力を持っている。今は大事にしすぎてるんだと思いますね。

□川や山に子どもたちを戻そう

子どもたちにこの頃「生きる力」ということばがよく言われますけれど、まさに子どもたちに生きる力を養うそのためには私は川はとていいところだと思います。ですからこの千曲川はほんとにすばらしいところ。こういうところで、たぶん昔は子どもがいっぱい遊んでいた、魚を捕ってた、そういう風景がこの夏には戻る、ということを実に願っています。そのためにはやっぱり川がき

れいじゃないといけませんよね。そうすると農薬をできるだけ少なくする、生活排水を流さないようにする、ましてや工場排水なんかはできるだけ処理したいいい水しか流さない、というようなことになる、ほんとうに環境がクリーンになるということだと思います。ですから私は子どもが川で遊べるようになれば、子どもの教育にはほんとにいいし、それから環境が本当にクリーンになった、という一つのシンボルじゃないかというふうに思っています。

このごろですね、子どもの問題はすぐ学力、学力、学力が落ちたばかりいわれるんですけども、もちろん基礎的な学力はきちっとつけなきゃいけません。これは文明国の人間である以上基礎学力は必要ですね。けどももっと大事なことは社会に出てちゃんと一人前になって社会人になって独立して暮らしていく、そういう社会性あるいは人間としての基本的な人格を子どものときにきちっとつけること、これが私は教育の一番大事なことだと思ってるんですが、そのためには、子どもを本当に山やら川やら野っばらで遊ばせてほしい。今の子どもは残念ながら部屋に入って親指運動ばかりしているから困るわけで、そういうことしないで、本当に全身でぶつかるような自然と戯れる、そういう子どもの世界が戻ればいいなというふうに思っています。

ちょうど20分くらいおしゃべりしました。どうもありがとうございました。

(かわい・まさお／兵庫県立丹波の森公苑長)